

# ハンブルク放射線殉職者顕彰碑

## Das Ehrenmal der Radiologie in Hamburg

Vogel H. Fortsch Röntgenstr 178:753-6,2006

ハンブルクにある世界の放射線従事者の顕彰碑には、359名の医師、物理学者、化学者、技師、実験助手、看護婦の名前が刻まれている。いずれもレントゲンが発見したX線を使用して、その障害に倒れた人々である。

顕彰碑は、1936年4月4日、聖ゲオルク病院のX線室に隣接する庭で除幕された(図1)。碑銘には次のようにある。「朋友の病を癒やす戦いに自らの命を犠牲にした全ての国の放射線科医、物理学者、化学者、技師、看護師のために。彼らはX線とラジウムの医学における安全な利用を目指した英雄的なパイオニアであった。その名誉ある行為は不滅である」。その後には、14ヶ国159名の殉職者の名前と生地がアルファベット順に羅列されている。

顕彰碑は、Hans Meyer, Heinrich Albers-Schönberg, Hermann Holthusenによるもので、彼らはいずれもドイツ放射線学会の会長をつとめ、その名前はドイツ放射線医学を代表するものである。ドイツ放射線学会では、毎年優秀な研究者に Albers-Schönberg メダル、Holthusen リングが授与されている。

### Hans Meyer

顕彰碑の資金を提供した Hans Meyer(図2)は、1877年ブレーメンに生まれ、マールブルク、ミュンヘン、ベルリン、キールに学んだ。1911年、キール病院初のX線学および光線治療の講師、放射線研究所長となり、1915年に教授となった。1920からはブレーメン州立病院の放射線部長、1945年からマールブルク放射線診療所長。1929年、1933年にはドイツ放射線学会長を務めた。Meyerは国際的な調査を行な



図1. 1936年4月4日、ハンブルクの庭における顕彰碑除幕式。顕彰碑の前に立つのはフランス放射線学会の泰斗 Antoine Béclère 教授。

い、159名の医師、物理学者、技術者、研究助手、看護婦を収集し、顕彰碑に刻んでその栄誉を讃えた。また各国の放射線学会に問い合わせて、写真と経歴を収集した。

### Hermann Georg Holthusen

Hans Meyer と Hermann Holthusen の要請により、ドイツ放射線学会は聖ゲオルク病院の庭を顕彰碑の場所に選んだ。

Hermann Georg Holthusen(図3)は、1886年にハンブルクに生まれ、ハイデルベルク、ベルリン、ミュンヘンに学んだ。1911年には、Albers-Schönberg の下で3か月間学んだ。1920年には、ハイデルベルクの放射線科講師となり、1921年にはハンブルクに招聘された。ここで聖ゲオルク病院の放射線部長の Albers-Schönberg の後任となり、1951年には放射線科教授となった。Holthusen は放射線治療部門を新設した。1929年にはハンブルクの議会にラジウム 1g を購入させた。1930年、1949年にはドイツ放射線学会会長をつとめた。また1924年、ロンドンにおける第1回国際放射線学会で設立された線量測定法と単位の検討委員会の事務長を務めた。

Holthusen は、レントゲンの「レントゲンを撮った」と自慢できる唯一の医師であった。X線発見者は、ハイデルベルクでは純粋な科学者で、その実践応用には興味を示さなかった。1919年、レントゲンは自ら治療を必要とする状態となった折に、この若い放射線科医の Holthusen に、「レントゲン室」の中に入ったのは初めてだと告白したという。

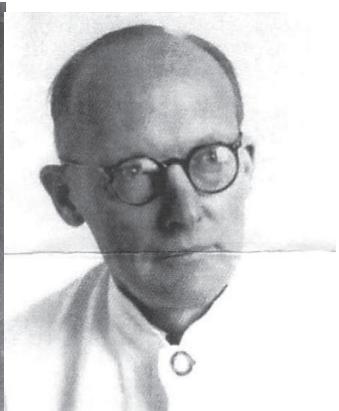


図2. Hans Meyer. 顕彰碑の資金提供者で、殉職者の名前を収集した。Strahlentherapie(放射線治療)誌の創設者である。

図3. Hermann Holthusen. Albers-Schönberg の後任として聖ゲオルク病院放射線部長を務めた。顕彰碑設立の実務者であった。

## Heinrich Albers-Schönberg

顕彰碑の場所に最も古く、最も伝統ある聖ゲオルク病院の庭が選ばれたのは、この病院のX線室の創設者、Heinrich Albers-Schönberg を顕彰するためであった。その名前は、顕彰碑の最上段に刻まれている。彼の生涯は、共に名前が刻まれている人々の典型例である。

Heinrich Albers-Schönberg(図4)は、1865年、ハンブルクに生まれ、チュービンゲン、ライプツィヒで医学を学んだ。1897年、Georg Deyckeとともにハンブルクに「X線医学衛生学研究のためのレントゲン室および研究所」を創設し、1897年9月にはGeorg Deyckeとともに *Fortschritte auf dem Gebiet der Röntgenstrahlen* 誌を創刊した。

その生殖腺の放射線感受性に関する研究は当時、世紀の変わり目における医師の放射線の危険に対する認識の良い例である。これはボランティアについても、医師自身についても言えることである。この研究は、生殖腺の放射線被ばくと不妊の関係を示すもので、Albers-Schönbergは、雄のウサギ5匹、雄のモルモット6匹を、12日間にわたって毎日8～12回、1520分間、ケージの床面の布を介して下から照射した。動物は不妊となったが、交接機能は保たれ、病的徵候もみられなかった。不妊の原因是精子数の減少であった。この論文は不妊が可逆的か否かについては結論が出ていないが、これが公表されると、ボンの医師 Philipp はこの「すべての動物実験の中で最も有益かつ有望な」動物実験から人体実験に進み、「容易かつ無痛の不妊化法の形で待ち望まれていた社会的治療法」と考えた。2人のボランティアにX線皮膚炎が起こるまで照射し、精巣萎縮を伴う無精子症が得られた。

1905年、Albers-Schönbergは、聖ゲオルク病院のX線検査の専門医になり、同年3月に、新築なった手術棟に自ら設計したX線部門を開設した。同年、ドイツレントゲン学会の共同創立者のひとりとなり、教授

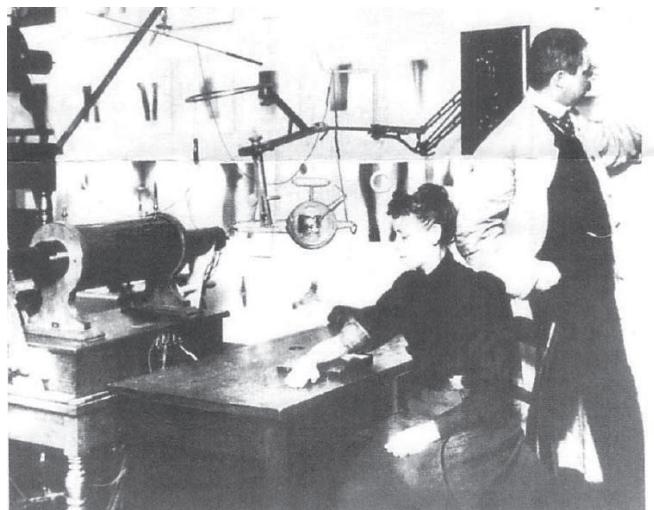


図4. 1903年、自分のレントゲン室での Albers-Schönberg. 机の上にX線管があるが、無遮蔽であるのがわかる。

に任命された。1919年、新設されたハンブルク大学に、彼のために世界初の放射線科のポストが設けられた。1921年、放射線誘発癌で死亡、その剖検結果は *Fortschritte auf dem Gebiet der Röntgenstrahlen* 誌上に発表された。彼は自ら科学に殉じたと見なされることには否定的で、自分の息子に「私は意識的に自分の健康を犠牲にしたわけではない。無意識のうちにこれを害した事は不運であった」と語っている。現在、Albers-Schönbergは、1904年に彼が初めて記載した大理石病にその名前をとどめている (Albers-Schönberg病)。

## 追加リスト 1938年、1960年

1938年、17名の殉職者の碑が、顕彰碑の両側に追加された。1960年、さらに2つの碑が追加され、殉職者数は359名となり(図5)、現在はこの形で聖ゲオルク病院の庭に立っている。

HolthusenとMeyerは以下の様に述べている。「当時X線の犠牲となった169名のパイオニアに加えて、最近多くの名前を追加しなくてはならなかった。顕彰碑に刻まれた名前が忘れられることのないよう、また後世への警鐘として、その経歴を新たな「Ehrenbuch」(顕彰録)としてまとめるにあたって、各国の放射線学会に協力を依頼した。いざこの地でも力強い支援が得られ、さらに190名もの名前が寄せられ、その大部分の履歴を手にすることことができた。我々はベストを尽したが、リストに遺漏があるとしたら謹んでその責を負うものである」

世界各国の放射線従事者と放射線科医の顕彰録には、40ヶ国から集まつた359名の略歴が収められており、その多くはフランス(65名)、ドイツ(59名)、アメリカ(55名)、イギリス(42名)からである。大部分は被ばく状況、病状、経歴が付されているが、ロシアのデータは死亡年月日と生地のみ、ある



図5. 1960年、追加の墓銘碑の除幕式。

いは死亡地のみの場合もある。個々の詳細については、各国の放射線雑誌の訃報欄に記載されている。オーストラリア、フィンランド、イスラエル、ユーゴスラビア、オランダ領東インド、ポーランド、ギリシアなど、1名ないし2名のみ報告されている国もある。名前だけで、その他詳細の記載がないものもある。

毎年、ベラルース、チェコ、カナダまで多くの国々から顕彰碑に関する問い合わせがある。

アメリカからは、顕彰録に掲載されている女性に関する質問が来た。これは第一次世界大戦における戦傷者の手当に女性が果たした役割についての議論に発展した。いずれも顕彰碑にその名前が刻まれている Marie Curie とその娘 Joliot-Curie は、第一次世界大戦中に技師としてのトレーニングを受けた。治癒を促す目的で、彼らは戦傷者にラジウムから発生する稀ガスであるラドンを夜間に集めて飲ませていた。

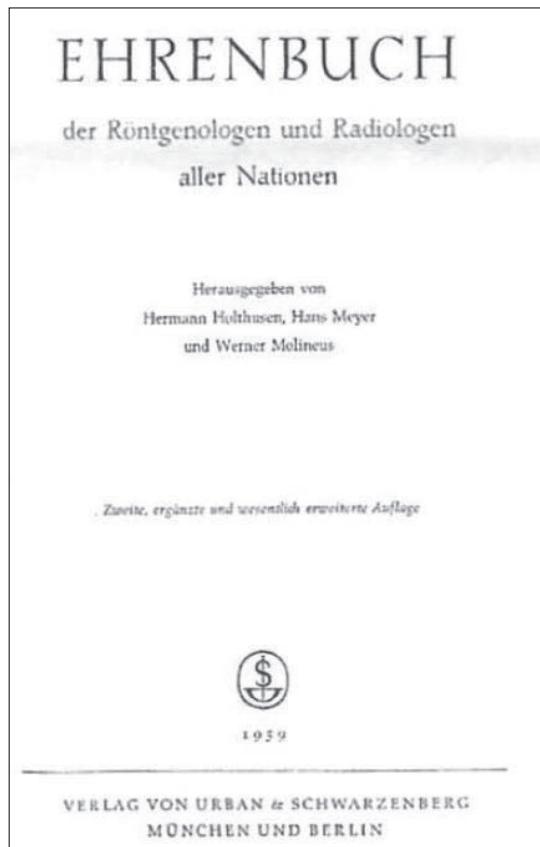


図 6. 顕彰録。359 名の殉職者が国別にリストされている。その多くには略歴が付されている。

近郊のみならず遠方からも訪問者がある。X線発見後初期のX線診断が臨床に与えた影響を研究しているイギリスの医史学家は、顕彰碑(図7)と Albers-Schönberg が作ったX線室の見学に訪れた。日本のパイオニアの孫は、祖父の功績を求めて訪れた。

除幕に際しては世界の放射線学界の泰斗, Antoine Béclère 教授が諸外国の放射線研究者を代表して、殉職者とその放射線科学への貢献を讃えて次のように述べた。「レントゲンの偉大な名前とその発見は、貴国が誇る国家的財産であります。貴国がこの顕彰碑にドイツ人の名前だけを刻んだとしても誰も批判するようなことはなかったでしょう。しかし貴殿らはそれを望まれず、同じ理想にその命を捧げ、犠牲となつたすべての文明國の人々の名前がここに同志としてともに等しく刻まれています」



図 7. 追加された顕彰碑のひとつ。1行目にはイギリス人の名前が見える。